東部ニューギニア戦

進攻篇

御田重宝

人間の記録

この記録を東部ニューギニアの戦場で死んでいった兵士たちに捧げる

講談社文庫

|著者|御田重宝　1929年生まれ。中国新聞社勤務、解説委員。著書『戦艦「大和」の建造』(講談社文庫)、『ノモンハン戦（攻防篇・壊滅篇）』(徳間書店)、『シベリア抑留』(講談社）ほか。

人間の記録 東部ニューギニア戦 進攻篇
御田重宝
© Shigetaka Onda 1988

講談社文庫
定価400円

昭和63年8月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版———豊国印刷株式会社
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫第二出版部あてにお願いいたします。　(庫二)

講談社文庫

人間の記録

東部ニューギニア戦

進攻篇

御田重宝

講談社

人間の記録　**東部ニューギニア戦**　進攻篇　目次

第一部　ポートモレスビー攻略作戦

誤断の陸路進攻　14

不運の四一連隊／転戦そして玉砕／F・S作戦の中止とレ号作戦の開始／陸と海の「クモの巣論争」／ポートモレスビーの戦略的位置／陸路進攻は不可能—現地軍の判断／辻大本営参謀の独断しめす電報／先遣隊出発と戦闘命令／ラバウルに集結／二十日分の糧秣とすくない火器

雨のジャングルを戦場に　46

部隊を編成、バサブアへ上陸／雨のジャングル夜中の行軍／補給計画ぬきの山越え／「弾薬と食糧は捨てるな」／スタンレー山脈に足をかける／密林に「瞰制の利」はない／「命のやり取り」をしたイスラバ攻略／ニューギニア戦の独特さ／雨の冷床に夜を徹す／見えぬモレスビー／いよいよ雑炊が始まる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

戦闘の激化と迫りくる飢餓 80
米、大規模な空輸／目前に敵を発見／どこを撃ってよいのかわからない／どしゃ降りのなかの戦闘／緒戦の犠牲十七人／大隊砲は使うな―コブ陣地突撃／戦場の真実とは／無限につづく山々／初補給は一四四連隊へ／二合の米で追及／パパイヤが夕食に／行き倒れ陣没者でる／イオリバイワに到達／伸びきった補給線

第二部　ジャングル死の撤退行軍

放棄されたスタンレー作戦 126
地図一枚の十七軍指揮／反転命令の理由／イモ畑で豪兵と遭遇／糧秣乏しく病人続出／米が盗まれるココダの混乱／糧秣弾薬の輸送／豪軍両翼を包囲／救援ついに来らず／いつ後退するやも測り難し

南海支隊苦闘す 153
泥濘の山中で退却援護／豪軍が陣地分断―血染めの金平糖／敵中をすり抜けるように撤退／マラリア患者続出／「この陣地をさがれ」／十六人で後方第一線を守る／豪州軍退路遮断をねらう／支隊オイビに集結／空腹と疲労の臨時輜重隊

退路を断たれて 182
退路を確認せずに撤退命令／攻撃をやめて迂回へ／前進するより難しい撤退／「火砲は砲兵の生命なり」／部下を拳銃で射つ／「暑いのう」／取り残される兵たち／「人間の生命の方が大切だ」／渡渉で患者続発／悲惨な飢餓死／重傷兵を「介錯」

クムシ河、死の渡河 216
支隊長も水死／激流に多数が溺死／必死でイカダ造り／ついに部隊解散／混乱の撤退／装備も食糧もなく／証言に隔たり／「敵がいる」／ゴナまで捜索行／海が見える／久しぶりの米の飯

第三部　バサブア守備隊全滅

孤立無援の奮戦 252
第一八軍の統帥発動／東部ニューギニアの兵力／ダンピール海峡の悲劇／ラバウルから駆逐艦でようやく上陸／タコツボを掘って抵抗／思いに殺してくれれば／増援失敗／本隊と分断された守備隊の運命

地獄の戦場 278
ヤシ林が丸坊主になる物量作戦／敵兵がすぐ目の前に／「強力に守備

している村落」／「おれの肉を食べて生きてくれ」／ギルワへ撤退めざす／戦友の死体を掩体に／死線さまよい脱出／味方か敵か／壕のなかを掃射／守備隊の義務と「独断脱出」

人間の記録　**東部ニューギニア戦**　全滅篇　内容紹介

第四部　西南地区の激戦

連合軍の追撃

包囲された死の陣地

西南地区＝竹中隊全滅

第五部　ギルワ陣地の崩壊

解体する軍隊

ギルワ陣地脱出行

第六部　「虐殺」作戦の結末

死者絶えぬ四一の兵

報われることなき帰国

カウラ捕虜収容所の暴動

単行本あとがき

解　説　光岡　明

太　平　洋

ミッドウェー島

島

ハワイ諸島

ホノルル

ラバウル

ガダルカナル島

モレスビー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間の記録

東部ニューギニア戦

進攻篇

第一部　ポートモレスビー攻略作戦

誤断の陸路進攻

不運の四一連隊

組織、集団にも運、不運がある。軍隊は戦闘集団であり、戦闘は近代的メカニズムの粋を結集した、いわば合理化の極致として設計されたものであろう。でなければ〝戦闘〟には勝てない。旧帝国陸軍も、合理化を旨としていた。その合理化集団にして、運、不運はついて回ったのである。

福山四一連隊は不運な部隊であった。第五師団隷下の基幹として広島一一、浜田二一、山口四二連隊とともに日支事変を戦い抜き、太平洋戦争突入と同時にマレー作戦を遂行、シンガポール陥落（昭和十七年二月十五日）後はフィリピンに投入されてパナイ島、ミンダナオ島の戡定（かんてい）作戦に従事させられた。

そのころ、陸軍は師団の編成を改正する方針を定めた。当時、一個師団は四個連隊で編成していたが、三個連隊制に切り替えることにしたのである。広島県には、一一連隊が五師団のおひざ元にある。同じ県内にある福山四一連隊が、俗な表現を借りれば〝貧乏くじ〟を引かされるはめになった。平壌（朝鮮）で新しく編成される三〇師団に組み入れられたのである（正式決定は昭和十七年十二月二十五日。ただしこの時は、ニューギニアのギルワで連隊は消滅しかかっていたのであるが……）。

福山四一連隊の不運は、五師団を離れることになった直後から始まったと言ってよい。比較的身軽になったのをねらわれたかのように、独立部隊なみに使用されたのである。

その第一は、大本営が開戦直後に計画したF・S（フィジー、サモア、ニューカレドニア諸島）作戦に予定されたことであろう。F・S作戦は、豪州の東方、つまり米国との間に点在するフィジー、ニューカレドニア諸島を占領して、米国と豪州の握手を分断しようとする、いわゆる〝米豪遮断〟をねらった遠大な作戦である。日本の大本営も、米国も、日本を攻撃するためには豪州を中継地とするであろうという点では一致していた。米国は、予定通り、豪州を足場として日本への進攻を達成したのであった。

もっとも、F・S作戦はミッドウェー海空戦（昭和十七年六月五日）の日本の決定的な大敗で中止されたが、福山四一連隊にとっては、さらに悲惨な〝貧乏くじ〟をつかまされることになった。東部ニューギニア作戦の中で、最も重要で困難とされたポートモレスビー攻略作戦に投入されたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com